介護 みんなで支える介護保険 No155

問 保健福祉課　介護福祉係
☎476-1111(141)

◆認知症について正しい知識を持ちましょう　part 8

10月号から引き続き、認知症の症状である『中核症状』と、今月号から『認知症の行動・心理症状とその支援』について紹介します。

《認知症の症状　～中核症状④～》

その５『感情表現の変化など』

認知症になるとその場の状況が読めなくなる

通常、自分の感情を表現した場合の周囲のリアクションは想像がつきます。私たちが育ってきた文化や環境、周囲の個性を学習して記憶しているからです。さらに、相手が知っている人ならかなり確実に予測できます。

認知症の人は、ときとして周囲の人が予測しない、思いがけない感情の反応を示します。それはこれまで掲載してきた中核症状（認知症による記憶障害、見当識障害、理解・判断の障害など）のため、周囲からの刺激や情報に対して正しい解釈ができなくなっているからです。

例えば、「そんな馬鹿な！」という言葉を、その場の状況を読めずに自分が馬鹿と言われたと解釈した認知症の人にストレートに怒りの感情をぶつけられたら、怒られた人はびっくりしてしまいます。認知症の人の行動がわかっていれば、少なくとも本人にとっては不自然な感情表現ではないことが理解できます。

《認知症の行動・心理症状とその支援》

認知症の初期に、元気がなくなったり引っ込み思案になるなど、うつのような状態を示すことがありますが、原因には『もの忘れなど認知機能の低下を自覚し、将来を悲観してうつ状態になる』という考え方と、『元気や、やる気が出ないこと自体が脳の細胞が死んでしまった結果である』という考え方があります。

自信を失い、すべてが面倒に

認知症の症状が出てくると、周囲が気づく前から本人は漠然と気がついています。これまでテキパキできた料理も手順が悪く、時間がかかるうえにうまくできなくなります。苦労して作っても「これまでと味が違う」などといわれ自信を失います。客が来たら出前をとることとなり、日頃の食事も買ってきたお惣菜で済ますようになります。

家の整理整頓や掃除も同じです。片付けるつもりが散らかって収拾がつかなくなり、大事なものはどこかに行ってしまうことになります。

意欲や気力が減退したように見えるので、うつ病とよく間違えられます。周囲からだらしなくなったと思われることもあるようです。すべてが面倒で、以前は面白かったことでも興味がわかないと感じる場合も多いようです。

◆大崎町の介護保険事業の報告

介護保険事業実績についての報告（利用者の１割負担を除いた大崎町の支払い分）

第1号被保険者（65歳以上の人）		4,932人	平成27年８月末日現在
要介護（支援）認定者		1,008人	
給付実績	在宅介護サービス費	43,839,898円	平成27年７月の給付実績
	施設介護サービス費	57,309,831円	
	その他（介護予防サービス費も含む）	32,467,306円	
	介護サービス費　　合計	133,617,035円	